

忍者の話「蝶々の舞」

昔、白雲という忍術使いがおりました。白雲は、忍術を使って悪い事をしておりましたから、とうとう捕まって今日は打ち首になる日です。

お代官様は、「白雲よ、お前もいよいよ打ち首だ。この世ともお別れじゃーなあ最後になにか、いいのこす事はなにか」と申されました。

白雲は、しばらくだまっておりましたが、おそろおそろ頭を上げて「私は忍術を使って悪い事をしてきた罰でいよいよこの世ともお別れでござーやすが、ただ一つ残念なことがござーやす。それは私が苦勞して憶えた十八番中の十八番で忍術の奥儀というべき「蝶々の舞い」という忍術を使わずに死んでしまうことが、非常に非常に残念でござーやす」といかに心のかりのようにハラハラと涙を流しました。

これを見てお代官様は「ホホーそれは残念だ。よしその蝶々の舞いというやつを、最後にやってみせよ」

「でも、忍術はこの世の御法度でござーやすので使うわけにはまいりません」

「代官の予が許すによって、早うやってくれ。皆の者、早々に準備をせよ」と申されましたので三十尺余の大竹が御役所のお庭の真中にまっすぐに五、六人のご家来衆によって立てられました。

白雲は、白ハチマキにハカマのももだちをとり、白扇を二本両手に持ってスルスルと猿のように大竹を登り頂上に片足でスクツと立ちました。

そして、両手の白扇をパーツと開きますと、足もとに紫色のうす雲がもくもくとおこりました。白雲はその雲に乗って、二匹の蝶々が花から花へ舞い遊び廻るように、楽しんで飛び舞い狂うのでした。

その美しさと見事さにお代官様も、ご家来衆も皆々うっとり見とれておりました。

そのうち白雲が乗っていた紫色の雲が白い雲に変わると白雲は、「お代官様、皆々様大変お世話になりました。それではこれにて失礼いたします。」といって舞いを舞いながら、いづこともなく消え去ってしまいました。